

かかわる力を育む幼小一貫の 道徳教育カリキュラム開発のための基礎研究（4）

宮里 智恵 神山 貴弥 鈴木由美子 長野 由知
中島 敦夫 君岡 智央 中山美充子

1. 問題と目的

本研究は広島大学附属三原学園の小学4年生と幼稚園年長児のペア活動を研究対象とし、人とかかわる力を育む幼小一貫の道徳教育カリキュラムの開発に必要な基礎資料を得ることを目的としたものである。本年度はその4年次である。

従来、年下の子どもとの交流活動では意欲的に交流する多数の児童をもって成果とされる傾向があり、そうでない少数の児童については見過ごされがちであった。しかし、学校教育においては一人でも多くの子どもが意欲的に交流できるように授業を工夫する必要がある。「かかわる力を育む幼小一貫の道徳教育カリキュラム開発のための基礎研究」として進めてきたこれまでの研究においても、交流に対する態度の3成分（感情成分・行動意図成分・認知成分）が交流期間を通して高レベルで推移する児童（全高群）が大半であるものの、交流を重ねるに従って感情成分が低下したり、認知成分と行動意図成分が低下したりする児童がいることが明らかにされた。これらの児童は交流活動をネガティブな体験と捉えていると考えられる。特に昨年度の研究（以下、研究3）から、児童が交流活動をネガティブな体験と捉える要因として児童の性格特性と園児や児童同士の組み合わせの問題が示唆された。そこで今年度の研究（以下、研究4）では、研究3の研究対象児に対して追加調査として性格検査を行い、感情低下群や認知行動意図低下群の児童に共通する性格特性を見出すことを試みる（研究4-1）。さらに、研究4-1の結果を生かしたペア組みで交流活動を行い、その効果の検討から、交流に対する態度をより高レベルで維持させる園児や児童同士の組み合わせのあり方を明らかにする（研究4-2）。

2. 研究4-1

2.1 目的

研究3で、毎回の交流後に行った質問紙調査について、感情得点、行動意図得点、認知得点のそれぞれを用いてward法によるクラスター分析を実施した結果、感情面が低下する児童（感情低下群）と認知面と行動意図面が低下する児童（認知行動意図低下群）の存在が明らかになった。これらの児童には交流をネガティブな体験と捉えさせる要因があったと考えられ、その要因を探るために児童本人への面接調査や担任教諭への聞き取り調査を行った。その結果、次のことが明らかになった。

- ・3人組（園児1名と小学4年生2名）で活動している児童8組において、一方の児童が積極的、もう一方が相手に合わせがち、或いは相対的な主張性の弱さといった性格特性を持つ場合、後者の児童で交流に対する態度の感情面の低下が見られた。後者の児童は面接調査において、もう一人の4年生との意見の相違や疎外感をネガティブな体験として挙げた。
- ・3人組でも4年生2人がともにやや積極性に欠ける性格特性を持つ場合には、交流に対する態度は低下していなかった。面接調査の結果、これらの児童はもう一人の4年生との意見の相違や疎外感などは挙げなかった。
- ・引っ込み思案や生真面目などの性格特性を持つ児童が園児との2人組の場合、交流に対する態度の認知面や行動意図面の低下が見られた。面接調査の結果、これらの児童はペア園児との交流に当初から不安感を抱いており、交流が開始されてからもペア園児とのかかわり方に悩みを持っていた。

これらの結果から、児童が交流活動をポジティブな体験と捉えるかネガティブな体験と捉えるかは児童の

Tomoe Miyasato, Takaya Kohyama, Yumiko Suzuki, Yoshitomo Nagano, Atsuo Nakashima, Tomotika Kimioka, Fumiko Nakayama : Investigation for the curriculum development of moral education between Kindergarten and elementary school from the point of sosial relation (part 4).

性格特性と活動人数（2人組・3人組）の関係の可能性が考えられる。そこで、より詳細な確認を行うために、研究4-1では研究3の研究対象児童に対して性格検査を行い、特に児童が交流活動をネガティブな体験と捉える要因の1つとして児童の性格特性と園児・児童同士の組み合わせの関係を検討する。

2.2 方法

2.2.1 調査参加者

研究3の研究対象児童 小学5年生77名

2.2.2 実施時期

2008年5月

2.2.3 手続き

曾我(1999)による小学生用5因子性格検査(FFPC: A study on standardization of the Five-Factor Personality inventory for Children)を集合調査法で実施した。1つの性格特性につき6問、計30問をランダムに配した調査用紙を配布し、調査参加者が自分のペースで質問紙を読み進め、回答した。回答は「はい」「どちらでもない」「いいえ」のいずれかを選ぶ3件法で、得点化にあたっては「はい」が3点、「どちらでもない」が2点、「いいえ」が1点とした。

2.3 結果と考察

性格検査の結果、3人組の一方が全高群もう一方が感情低下群となった8組においては、特に統制性において対照的な結果となった。すなわち、統制性の学年平均値2.25 (SD0.43) に対して全高群8名の平均値は学年平均値より0.25ポイント高い2.50 (SD0.39)、感情低下群8名の平均値は学年平均値より0.28ポイント低い1.97 (SD0.37) であった。曾我(1999)によれば、統制性とは「ある一定の価値基準に従って自己を統制する。責任感が強く、物事に積極的に取り組もうとする傾向」で、担任教諭が全高群の児童を積極的と捉える一方、感情低下群の児童を相手に合わせがち、或いは相対的な主張性の弱さを持つと捉えた点と一致している。これにより統制性の値の低い児童では、統制性の値の高い児童との3人組とすることで交流に対する態度の感情面の低下が起こることが明らかになった。また、4年生が両者とも全高群に属した3人組は4名であったが、性格検査の結果4名共に統制性の値が低かった(学年平均値:2.25, SD:0.43, A児:2.00, B児:1.50, C児:1.75, D児:1.63)。これらの児童は担任教諭からはやや積極性に欠けるとされており、性格検査の結果と一致している。このことから、統制性の低い児童の場合は3人組としても交流がネガティブな体験となりにくいことが明らかになった。従って統制性の値の低い児童は園児との2人組か同じく統制性の値が低いか高くない児童との3人組が適当と考え

られる。

一方、認知行動意図低下群の児童についての性格検査では、3名のうち2名において情緒性が学年平均値よりも高いことが示された(学年平均値:2.24, SD:0.49, A児:2.63, B児:2.75)。曾我(1999)によれば、情緒性とは「ストレスや脅威、あるいは他人の思惑に対して敏感で、緊張や不安が強い。何事にも自信がなく、落ち込みやすい傾向」で、この2名が担任教諭から引っ込み思案と指摘された点と一致している。情緒性以外の因子については3名とも学年平均値との差が少ないことから、認知行動意図低下群の児童については情緒性の高さが特徴と考えられる。これにより情緒性の値の高い児童では、園児との2人組とすることで交流に対する態度の認知面・行動意図面の低下が起こることが明らかになった。従って情緒性の値の高い児童は同じく情緒性の値の高いか低くない児童との3人組とすることが適当と考えられる。

3. 研究4-2

3.1 目的

研究4-1により、性格検査で統制性が低い児童は統制性が高い児童との組み合わせでは意見の相違などでネガティブな体験となりやすいこと、情緒性が高い児童は園児と1対1の組み合わせでは園児との関係の構築に苦慮しがちでネガティブな体験となりやすいことが示された。そこで研究4-2では園児とのペア組みの前に4年生に性格検査を実施し、統制性の値が低い児童は園児との2人組とするか統制性の値が低い児童との3人組とし、情緒性の値が高い児童は情緒性の値が高い児童との3人組として園児との交流活動を行う。これによる効果を交流活動に対する態度の側面から検討することを研究4-2の目的とする。

3.2 方法

3.2.1 調査参加者

小学4年生77名

3.2.2 実施時期

2008年6月～12月

3.2.3 研究計画

2008年5月:性格検査の実施と園児・児童との2人組3人組の決定

2008年6月～12月:園児との交流授業実施(12回)

2008年6月～12月:交流授業について参与観察

2008年6月～12月:毎回の交流授業後に交流に対する質問紙調査実施

2008年7月:交流や活動の人数に対する捉えについて面接調査実施

3.2.4 手続き

3.2.4.1 性格検査の方法と内容

研究4-1と同様で、曾我(1999)による小学生用5因子性格検査を用いた。検査は集合調査法によって実施した。

3.2.4.2 性格検査の結果にもとづいたペア組み

性格検査の結果、統制性の値が低い(学年の下位20%以内)児童については、同じように統制性の値が低いか高くない(学年の下位20%~30%以内)児童との3人組、または園児との2人組とした。情緒性の値が高い(学年の上位20%以内)児童については同じように情緒性の値が高いか低くない(学年の上位20%~30%以内)児童との3人組とした。

3.2.4.3 交流活動の方法と内容

交流活動は12回で、内容は表1に示す通りである。6回目までは児童、園児の関係構築期間として2人組、3人組による交流を行い、7回目以降は固定的な関係からの脱却やより滑らかな関係構築のための児童間の学び合いの期間として複数組による活動を行った。

表1 交流活動の内容

回	時期	活動内容
1		出会い(自己紹介と自由遊び)
2		
3	6月	運動会のダンスを教える
4		
5		
6		運動会でダンスを一緒に踊る
7	7月	4年生が図画工作科で作った作品で遊ぶ
8	10月	遠足のおやつを買いに行く
9		遠足に行く
10	11月~ 12月	クリスマスツリーを飾り付ける
11		
12		クリスマス会をする

3.2.4.4 参与観察および交流に対する態度の質問紙調査の方法と内容

12回の交流活動に担任教諭と観察者(筆者)が参与し、研究対象とした児童が園児とかかわる様子を観察した。また、授業後には交流に対する態度についての質問紙調査を研究3と同じ方法で実施した。

3.2.4.5 交流に対する態度についての児童の分類

交流に対する態度について児童を分類するために、毎回の交流後に行った6回の質問紙調査について感情得点、行動意図得点、認知得点のそれぞれを用いて

word法によるクラスター分析を実施した。

3.2.4.6 面接調査の方法と内容

交流活動に対する捉えをつかむことを目的に、交流活動を6回行った時点で面接調査を実施し、研究3の研究結果と比較した。調査は筆者が児童に対し個別に行った。面接調査の主な内容は次の通りである。

- ①ペア(園児)の名前は誰か。
- ②ペアを何と呼んでいるか。
- ③ペアはあなたを何と呼んでいるか。
- ④交流をしてきて楽しかったか。
- ⑤どんなことが楽しかったか。
- ⑥楽しくないときもあったか。
- ⑦どんなことが楽しくなかったか。
- ⑧これからも交流を続けたいか。
- ⑨何人組で交流しているか。
- ⑩〇人組の交流はやりやすいか。
- ⑪どんなところがやりやすいか。
- ⑫〇人組の交流でやりにくいところはあるか。
- ⑬どんなところがやりにくいのか。

4. 結果と考察

4.1 統制性低児

性格検査の結果、統制性の学年平均値は2.24(SD:0.45)であった。ここでは学年の下位20%以内の児童(統制性値1.88以下)12名についての結果を述べる。12名の内男子2名、女子2名を3人組とし、それ以外の8名は園児との2人組とした。3人組の相手児童の統制性は学年の下位20~30%以内の児童であった。

4.1.1 交流活動に対する態度への授業の効果の検討

クラスター分析の結果、交流に対する態度が一貫して高い値を示す「全高群」、感情成分の値が低いまま推移する「感情低群」、感情成分の値が上昇し行動意図成分の値が低い「感情上昇行動低群」の3クラスターが明らかになった。表2は各クラスターにおける交流毎の平均値を感情成分・行動意図成分・認知成分毎に示したものである。これらのクラスターへの統制性低児の分布を確認すると、12名のうち全高群に8名、感情上昇行動低群に4名であった。つまり、統制性低児は交流活動に対する態度として66.7%が3成分の全てで高い値を維持し、33.3%が行動意図成分は高まっていなものの感情成分は高まったことが明らかになった。研究3における統制性低児は感情低下群に属していたことと比較すると、研究4におけるペア組みは統制性低児の交流活動に対する態度の3成分全てを高い値で維持する或いは感情成分を上昇させる効果があったことが分かる。

表2 活動内容毎の各群における3成分の平均値

活動内容		全高群 45人	感情低 群 17人	感情上 昇行動 低群 12人	分散分析 後の下位 検定の結 果
事前	感情	0.168	-0.382	-0.093	1>2
	行動	0.297	0.003	-1.12	1>2>3
	認知	0.068	0.068	-0.349	なし
出会い	感情	0.28	-0.676	-0.093	1>3>2
	行動	0.054	-0.064	-0.113	なし
	認知	0.068	0.009	-0.265	なし
運動会 教える	感情	0.073	-0.104	-0.124	なし
	行動	0.069	-0.09	-0.132	なし
	認知	0.069	-0.09	-0.132	なし
運動会 踊る	感情	0.226	-0.789	0.27	1>2, 3>2
	行動	0.108	-0.127	-0.225	1>2, 1>3
	認知	0.068	0.009	-0.265	なし

4.1.2 面接調査にもとづく授業の効果の検討

研究3における統制性低児（8名）への面接調査結果と比較して検討する。

4.1.2.1 ポジティブ体験の有無

図1, 2は交流活動において楽しいことがあったかどうかを尋ねた結果である。研究3, 4とも研究対象児全員が「楽しいことがあった」と回答し、ポジティブ体験有りを示唆した。児童がポジティブ体験と捉えた内容は「一緒に遊んだこと」「園児が喜んでくれたこと」などで、研究3, 4で共通していた。

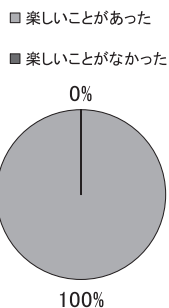


図1 研究3のポジティブ体験の有無

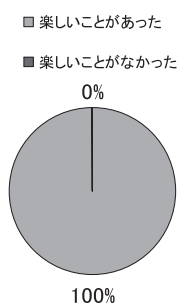


図2 研究4のポジティブ体験の有無

4.1.2.2 ネガティブ体験の有無

図3, 4は交流活動において楽しくないことがあったかどうかを尋ねた結果である。研究3では「楽しくないことがあった」と回答した児童は50%（8名中4名）いたが、研究4では16.7%（12名中2名）と大きく減少した。児童がネガティブ体験と捉えたのは、研究3, 4ともに「園児が言うことを聞かない」などの

園児とのかかわり方の問題と、「3人組なのでもう一人の4年生が園児とかかわっている時、自分に役割がない」という活動人数の問題であった。研究4においては3人組という活動人数にかかわる問題を改善する意図で統制性低児同士を組み合わせさせたが、1名につい

Legend: ■楽しくないことがあった (Dark Grey), ■楽しくないことはなかった (Light Grey)

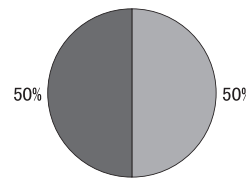


図3 研究3のネガティブ体験の有無

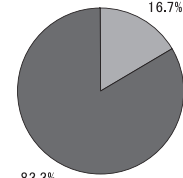


図4 研究4のネガティブ体験の有無

では改善できなかった。

そこで、活動人数に対する児童全体の捉えをさらに詳細につかむために、活動人数の「よさ」・「よくなさ」

Legend: ■なし (Dark Grey), ■協力・相談 (Light Grey), □活動の自由 (White), ■ペアの孤独回避 (Dark Grey), ■ペアの楽しみ優先 (Light Grey), ■ペアの活動 (White), ■ペアの活動 (White), ■ペアの活動 (White)

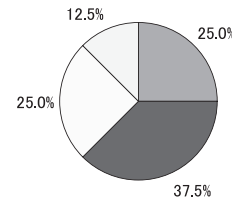


図5 研究3 3人組のよさ

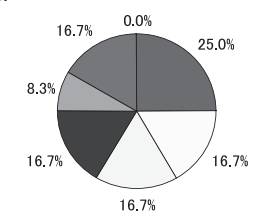


図6 研究4 2人組・3人組のよさ

を尋ねた。図5, 6, 7, 8はその結果である。

4.1.2.3 活動人数に対する捉え

図5, 6によれば、研究3では活動人数についての「よさ」を「なし」とした割合は25%であったが、研究4では0%となり、研究4ではどの児童も何らかの良さを感じたことが分かった。「よさ」の理由としては、研究3では「4年生同士の協力・相談ができる」「3人いると大きな活動ができて楽しい」という4年生にとってのよさを挙げた者が合わせて62.5%おり、「ペアが1人になることがなくてすむ（ペアの孤独回避）」といった園児にとってのよさを挙げた者は12.5%であった。これに対して研究4では「ペアを独占できる」「活動を自由に決められる」という4年生にとってのよさを挙げた者は合わせて41.7%で、研究3より減少した。さらに、「ペアが1人になることがない（3人組：ペアの孤独回避）」「ペアの遊び相手が2人いる（3人組：ペアの楽しみ優先）」「4年生が2人だとペアが話しにくいかもしれない（2人組：ペアの活動楽）」な

ど園児にとってのよさを挙げた者が合わせて41.7%おり、研究3より大きく増加した。これらの結果から、研究4においては研究対象児全員が活動人数に対して満足感を感じており、その満足感の理由も自分にとってのよさより園児にとってのよさを多く挙げていることが分かった。先の活動人数についてネガティブ体験ありとした児童も3人組のよさを園児にとってのよさとして捉えており、この児童にとって3人組は自己の体験としてはネガティブなものであるものの、ペア園児にとってはよさがあると捉えていると考えられる。

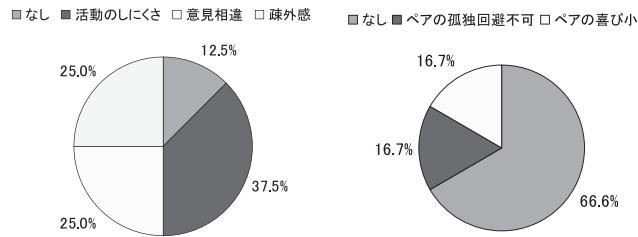


図7 研究3 3人組のよくなさ

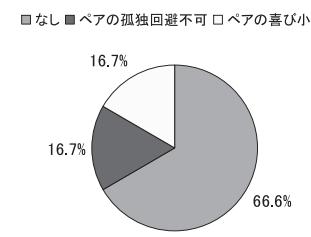


図8 研究4 2人組・3人組のよくなさ

図7、8は活動人数に対するよくなさを尋ねた結果である。研究3では87.5%の児童が活動人数に対してよくなさを感じていたが、研究4では33.4%と大きく減少した。よくなさの理由は、研究3では「活動のしにくさ」「4年生同士の意見の相違」「疎外感」と全て4年生にとってのよくなさであったが、研究4では「4年生が休むとペア園児が寂しい（2人組）：ペアの孤独回避不可」「ペアにとっては人数が多い方が楽しいかもしれない：ペアの喜び小」と全てペア園児にとってのよくなさであった。この活動人数のよくなさをペア園児にとってのものとする考え方は研究4に特徴的なものである。

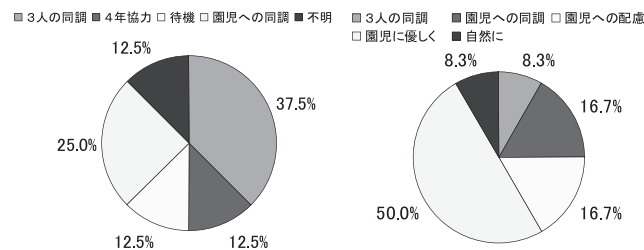


図9 研究3 仲良くするためにしていること

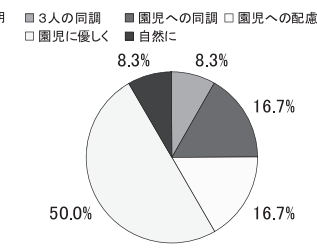


図10 研究4 仲良くするためにしていること

4.1.2.4 活動組で仲良くするためにしていること

図9、10によれば、研究3では2人組・3人組で仲良くするためにしていることは「3人の同調」や「4年生同士の協力」などもう一人の4年生の存在を意識

したものが多く、研究4では「園児の意見を先に聞く：園児への同調」「園児にダンスを正しく教える：園児への配慮」「園児に優しくする」など、園児を意識したものが多かった。3人組に絞って検討すると、研究3では園児への同調・配慮を挙げたのは4分の1であったが研究4では4分の3に増加した。また、研究4では2人組の児童全員が園児への同調か配慮をあげており、2人組では特にペア園児への着目が高まるということが明らかになった。

以上述べてきた通り、研究3から4にかけて活動人数に対するネガティブな捉えが減少し、ポジティブな捉えが増加した。また、ポジティブな捉えの理由もネガティブな捉えの理由も自分たち4年生にとってのものからペア園児にとってのものへと変容した。さらに、活動組で仲良くするためにしていることも研究4では園児への着目が増加した。これらについては次のように考える。すなわち、統制性とはある一定の価値基準に従って自己を統制し物事に積極的に取り組むという性格特性であるが、ここに挙げたのはこの値が低い児童である。研究4で活動人数に対するネガティブな捉えが減少し、ポジティブな捉えが増加したのは、統制性の低さゆえ、ペア園児やもう1人の4年生の気持ちや行動を柔軟に受け入れることができたのではないかと考える。また、それにより児童の意識は交流活動の直接の相手であるペア園児に向き、2人組であっても3人組であってもペア園児を中心とした行動をとることができたのであろう。それは自ずとペア園児からの笑顔や喜び表現などポジティブなフィードバックを得ることにつながり、活動人数に対するポジティブな捉えにもつながったものと考えられる。

こうしたことから、研究4で統制性低児に対して行った2人組・3人組の措置は交流に対する態度を高レベルで維持させることや感情成分を上昇させることに有効に働いたものと考えられる。

4.2 情緒性高児

性格検査の結果、情緒性の学年平均値は2.22 (SD 0.46)であった。研究4では学年の上位20%以内の児童(情緒性値2.63以上)を研究対象とし、該当児童は3名であった。情緒性高児は活動人数を3人組とし、相手児童の情緒性は学年の上位20~30%以内の児童であった。

4.2.1 交流活動に対する態度への授業の効果の検討

情緒性高児について交流活動に対する態度の3クラスターへの分布を確認すると、研究4では情緒性高児は3人全員が感情低群に属していた。このことから交流活動の中で、情緒性高児の感情成分が上昇しない何らかの要因があったことが考えられる。

4.2.2 面接調査にもとづく授業の効果の検討

面接調査は情緒性高児の感情成分が上昇しない要因をつかむことを目的に実施した。研究3における情緒性高児(3人)への面接調査結果と比較して検討する。

4.2.2.1 ポジティブ体験の有無

交流活動において楽しいことがあったかどうかを尋ねたところ、研究3では3人中2人が「なかった」と回答し、「あった」と回答した児童もその理由を「最近しゃべれるようになったこと」を挙げた。これに対し研究4では、全員が「楽しいことがあった」と回答し、その理由も「一緒に活動したこと」を挙げた。このことから、研究3に比べ研究4では情緒性高児においてもポジティブな体験を得られたことが分かった。

4.2.2.2 ネガティブ体験の有無

交流活動において楽しくないことがあったかを尋ねたところ、研究3では全員が「あった」と回答し、その理由に「私が遊びたい遊びを幼稚園ができないので遊びが続かない」「楽しく遊べない」「ペア園児が言うことを聞かない」など、自分にとって楽しくない体験をもって「楽しくなかった」としていた。これに対し、研究4では楽しくないことが「あった」とした児童は3人中1人のみで、その理由は「ペア園児が言うことを聞かない」であった。交流活動をネガティブな体験と捉えた児童は研究3より減少した。

4.2.2.3 活動人数に対する捉え

研究3では活動人数に関する質問を行っていないので、ここでは研究4の結果のみを述べる。まず、「3人組のよさ」としては「1人が何らかの用事をしてもう1人がペアを見ることが出来る：ペアの孤独回避」を挙げた者が1人で、あとの2人は「相手がやんちゃなので2人で助け合える」「ペアを早く見つけられる」を挙げた。このように情緒性高児3人のうち2人は、3人組のよさを自分にとってのよさとして捉えていた。

また、「3人組のよくなさ」としては「無し」を挙げた者が1人で、他の2人は「どちらの言うことを聞くかペアが迷う」「2人の名前をペアがなかなか覚えられない」と園児側の困惑を理由に挙げた。

4.2.2.4 3人組が仲良くするためにしていること

この質問も研究4のみで行った。「もう1人の4年生と同じように仕事を分けてけんかしない：4年生同士の協調」を挙げたのは1人で、あとの2人は「もう1人の4年生が役割の仕事をしているとき、ペアを1人にしないようにする」「ペアにケガをさせないようにする」のように「園児への配慮」を挙げた。

研究対象者が少人数で一般的な傾向とは言えないものの、情緒性高児への面接結果については次のように考える。すなわち、情緒性高児の性格特性は緊張や不

安が強く自信がないとされるが、彼らが3人組のよさとして自分にとってのよさを挙げ、よくなさとして無しまたは園児にとってのよくなさを挙げたのは、彼らにとって同様の性格を持つ児童と共に活動することは心強いことであり、その心強さから活動人数への満足感やペア園児にとってのよくなさを考える気持ちの余裕、あるいは園児への配慮といった視点が生まれているのではないかということである。そうであるならば、研究4で情緒性の高い児童を同様の性格特性をもつ児童との3人組としたことは、児童にとってもペア園児にとっても望ましい結果を生んでいると考える。一方で、交流に対する態度の感情成分が上昇しないのは情緒性の高さに所以し、性格特性としての緊張感や不安感にはぬぐい去れず、まだ交流活動を楽しいと感じるほどポジティブな体験が積み重なっていないのではないかと考える。しかし、参与観察においても交流活動が進むにつれて情緒性高児がペア園児と進んでかわり、交流を楽しむ様子が観察されている。こうしたことから、今後も交流活動を継続することで感情成分の高まりを期待できるのではないかと考える。

5. まとめ

本研究の目的は幼稚園児との交流に対する態度をより高レベルで維持させる園児や児童同士の組み合わせのあり方を明らかにすることである。研究4-1の結果、3人組で活動した感情低下群の児童は統制性の値が低く、2人組で活動した認知行動意図低下群の児童は情緒性の値が高いことが明らかになった。そこで研究4-2では、事前に性格検査を行い、統制性低児は園児との2人組か統制性低児との3人組とし、情緒性高児は情緒性高児との3人組として交流活動を行った。その結果、統制性低児では交流に対する態度3成分の高レベル維持や感情成分の上昇がみられた。ただ、感情成分が上昇した半面、行動意図成分が低レベルで推移した児童については、さらにインパクトのある交流を継続して行くなど行動意図成分をも上昇させる手だてが必要と考える。一方、情緒性高児においては感情成分が上昇せず低レベルで推移した。しかし、面接調査や参与観察の結果ペア園児に対する意識は少しずつ高まっており、情緒性高児を情緒性高児との3人組とした組み合わせに問題はなかったと考える。従って、今後も交流活動を継続することで園児との関係がさらに深まり、感情成分の上昇が期待できると考える。

引用文献

曾我 祥子 1999 小学生用5因子性格検査 (FFPC) の標準化 心理学研究 第70巻 第4号 346-351